研究動向 神社建築史研究の課題

The Problems for the Study of the History of Japanese Shrine Architecture

山岸 常人

The forms of the architecture of shrines do not impart Japanese traditional forms before the introduce of Buddhist architecture, but have transformed themselves according to the social situations of middle-ages and early modern-ages. When we realise as stated above, what kind of points of view are possible as the method for the studies of the architecture of shrines from now on? We are going to consider the movement of recent studies.

1. はじめに

神社建築は仏教建築が導入される以前の日本古来の建築形式を伝えるものであるという認識は、建築学を学ぶ多くの者だけでなく、日本人の多くが信じている虚構⁽¹⁾である。この虚構を突き崩し、神社建築に関する正しい歴史認識に到達するべきであるとの言説が近年明確に語られるようになってきた。しかもそれは単なるイデオロギーとしての言説ではなく、実証的な裏付けをもって言われるようになってきているが、ではどのような神社建築の歴史像が描きうるのか、という段階には未だ到達していない。筆者も長らくこの問題について思量を巡らしてきているが、本稿では神社建築の「虚構」に関わる諸問題について、何故それが虚構であり、虚構を乗り越えるにはいかなる視点が必要なのかについて、近年の研究状況を概観しつつ若干の考察を試みたい。

2. 神社建築に対する通説的理解

まず身近なところからはじめたい。日本建築学会編『日本建築史図集』（彰国社 以下図集と略記する）は、私が学生時代に日本建築史の講義を受けた際も、また現在私が日本建築史の講義を行う際にも手許に置いて、通算三十年近く愛用してきた日本建築史の標準的な教科書であり、また副読本と言ってよい優れた書物である。私が最初に手にした版は昭和三十八年五月に発行された第9版であり、最近講義用で使用しているのは昭和五十五年三月発行の新訂第1版である。いずれも序文によれば「図版の収集・配列および解説」を稲垣栄三が担当している。以下は新訂第1版によって記述する。

本書の編集方針を、編集者の言説によって具体的に知ることはできないが、その構成から見て、現存遺構を時代順の主題別に配列していると考えられる。ただし勿論現存遺構の存在しない建築類型では、復原図面や絵画史料で代用されている。その中で唯一例外が古代の神社建築の項である⁽²⁾。具体的には「伊勢神宮」「大社造」「住吉造」と「春日造」「流造」「古代の神社本殿形式」の二群の項目が立てられている。最後の項で明らかなようにこれらはいずれも古代もしくはそれ以前の時代に属する建築と位置づけられており、前者の一群が法隆寺より前に置かれていることから、奈良時代以前の建築と位置づけられていることを示唆している。しかし周知の如く、杵築大社・住吉大社・春日大社・日吉大社の本殿はいずれも近世に再建された建物であり、伊勢神宮は現代に建てられた建物と言ってよい。即ち神社建築の項は現存遺構の建立年代とは関係なく、建築の形式によって解説されていることになる。このことは単に編集の方式にすぎないと言えなくもないが、ではそれら神社本殿の現存遺構の形式が果たしていつまで遡るかと言えば、それは甚だあやしいと言わざるを得ない。図集の解説（109・110頁）では伊勢・杵築・住吉に関して「古式」「古制」等の言葉が散見されるが一体それはいつまで遡ることを示しているのだろうか。換言すれば現存遺構の歴史的連続性は如何なるものであるのか、という問題である。

上述のような認識が固定化した要因はどこにあるのだろうか。それは明治以降の国家神道の影響に他ならない⁽³⁾。そしてそれを助長した文化的背景もあった。

ブルーノ・タウトは近代的な意味で伊勢神宮を発見した。彼は『日本美の再発見』⁽⁴⁾において、伊勢神宮を日本建築における「絶対に日本的なもの」（17頁）「一切のものがそのまま芸術的」（19頁）と称讃し、かつ式年造替を

行っていることによってアクロポリスのような廃墟でもないとして、伊勢神宮が貴重であるとの認識を日本人に植え付けた。タウトは伊勢神宮正殿の発生を二世紀以前に遡るものとしている(35頁)⁽⁵⁾。日本人はこの認識を無批判に、むしろ好都合のものとして受容したと見られる。タウトの言説は神国日本の国威を発揚しようとする昭和初期の政府やそれに与する国民にとっては、政治的・文化的に極めて好都合であったはずである。建築史学者も意識的であると否とを問わずこのタウトの呪縛を逃れることはできなかった。つまり第二次大戦前の国家主義、或いは国家神道による思想的統制のもとで、聊か建築学的な、或いは芸術学的な外皮を纏ったタウトの言説がそれを助長したのである。

戦後になってもこの呪縛から逃れることは容易ではなかった⁽⁶⁾。それは国家神道の発想から脱却しようとしなかった建築史家の怠慢と共に、古いものほど貴重だという尚古趣味が建築史の世界、或いはそれと密接な関わりを持つ文化財保護の分野において長らく続いたということと無関係ではなかろう。つい二十年ほど前までは江戸時代の寺社建築ですら、若干の幕府関係の建築を除いて殆ど省みられることすらなかったのはその象徴的な現れであろう。近世より中世、中世より古代の建築の方が価値が高かったのである。因みに近年の考古学的調査の知見に関する大衆報道の姿勢はこの尚古趣味を未だに脱していないくらいがある。

そこで神社建築の連続性の実態について見たい。

3. 伊勢神宮と杵築大社

伊勢神宮の建築は、福山敏男の精緻な考証⁽⁷⁾によって奈良時代に遡っても現状とほぼ同じ建築形式をもっていたことが確実な唯一の例である。そして伊勢神宮の建築形式は式年造替の制度の成立した持統四年(大神宮諸雜事記)まで遡る⁽⁸⁾。即ち伊勢神宮に関しては約1300年の連続性をもっていたと考えて大過ない。

しかしこれが直ちに、神社建築一般の形式が七世紀以前に遡り、それ以来不変であることには結びつくわけではない。これに関連して考慮すべき点は三点ある。その第一は伊勢神宮の社殿の建設が持統朝以前には遡ることがないと考えられる点⁽⁹⁾、第二に、周知の如く正殿を取り巻く殿舎群の配置は、奈良時代と現状では大きく異なっている事実、第三に、これが最も重要であるが、伊勢神宮が国家によって祭祀が行われる王権の守護神であって⁽¹⁰⁾、従って他の一般的な神社の規範にはならなかった点⁽¹¹⁾である。第二の点は祭祀の内容や神社の組織と関連する問題であり、それらの変遷が社殿の構成に大きく関与していたであろう関係を抜きに論ずることはできない。

一方、杵築大社本殿は、時代による変化があるという認識がなされてきた建物である。但しそれは高さに関してであって、建築の構造形式や意匠に関しては変化がないことが前提とされてきた。しかし近年の藤澤 彰の詳細な研究⁽¹²⁾によって、杵築大社は慶長度の造営と、寛文度の造営に際して、構造形式がかなり変化したこと、およびその要因が明らかになった。

即ち、慶長度の造営の本殿は、礎石が用いられ、組物は出組、従って妻の棟通りの柱は棟持柱とならないという特徴を持っており、礎石・階隠・四方の羽目板はこの時に形式変更がなされたものであった。

寛文度の造営では、幕府が二手先組物、腰組は四手先組物、妻飾は二重虹梁大瓶束の近世的な形式の再建計画を作成したが、大社側の意向で、組物は舟肘木、妻飾は二重梁で宇豆柱を用いた現状とほぼ同様の形式に計画変更され、造営が行われた。

慶長度造営の本殿では組物がある関係上、宇豆柱がなかった、即ち妻の棟通りの柱が隅の柱心より外へ出ていたわけではないと考えられるが、寛文度の造営において復古的な形式を採用した結果、現状のような杵築大社本殿の建築形式の特質が生じたと見ることができる。そもそも、寛文度の造営は神仏分離を目指したもので、境内から仏教の施設を排除したが、建築形式に関しても仏教の影響を意図的に排除し、代わって採用されたのが復古的な形式であった。採用はされなかったが、計画段階では棟持柱(すて柱)の使用までも検討されていた。

この場合の復古とは、当時の国造家もしくは大社の作事組織が古式だと考えたにすぎないのであって、学問的観点から、杵築大社本殿の中世、もしくは古代の形式と一致しているとは限らない点が重要である。

更に、三浦正幸が明らかにしたように⁽¹³⁾、左経記に記されている長元四年(1032)の本殿転倒の記録があるが、これは、出雲国司が虚偽の報告を朝廷に提出したもので、そのため当該国司は翌年配流されている。この国司の報告は杵築大社本殿が極めて規模の大きい建物であることを示す傍証史料として使われてきたものであるが、三浦の考証によって、この史料は杵築大社本殿の規模を論ずる際に使えない事が明らかとなった。勿論それが直ちに杵築大社本殿の高さの十六丈、もしくは三十二丈との説を否定することには繋がらないにせよ、杵築大社の神殿が古代には壮大であったとするある種の古代崇拜的な発想は見直すべきである事の一つの証左となる。

以上のように杵築大社は規模や建築形式が寛文以前に遡り得ないことが重要である。併せて杵築大社では十六世

紀中期に尼子氏の力で仏教施設が充実し、それが寛文になって唯一神道による復古的な政策のもとで再び排除されたという宗教的な変動も看過することはできない。

なお、杵築大社とは、通常、日本建築史では出雲大社と呼んでいる神社であるが、近世以前の史料では杵築大社と記されており、歴史叙述の際に近代以降の宗教法人名称を用いることは、学問的には正しい態度といえないだろう。

4. 神社本殿の成立と流布

伊勢神宮は持統朝以来、本殿（正殿）の形式をほぼ変更することなく維持してきたが、持統朝を遡ることはない。杵築大社本殿は時代を遡るにつれて規模が大きくなる、逆に言えば時代が降るほど規模は縮小したという仮説は確実性が薄れ、建築形式は慶長以前に現状と差が生じている可能性がある。伊勢神宮の神明造は国家の制度として模倣を許さない孤立的本殿形式であったが、杵築大社の大社造も、現実には寛文以後出雲地域に限って流布した限定的な特殊な形式であった⁽¹⁴⁾。

では他の本殿形式はどうであろうか。

住吉大社は天平勝宝元年（七四九）・天平宝字二年（七五八）等に造営の記録があり⁽¹⁵⁾、その前後に社殿が成立したと推定されている⁽¹⁶⁾。しかし信憑性に問題があり、日本後紀弘仁三年（八一二）六月辛卯条が社殿の存在を示す確度の高い初出史料となろう。しかし、あえて異を唱えれば、これとて本殿の存在は証明するものではない。

日吉大社本殿の創建については確実な史料がないが、日吉造の本殿形式は天台南山無動寺建立和尚伝によって、仁和三年（八八七）に東本宮、寛平二年（八九〇）に西本宮が建立された時に遡るとされている⁽¹⁷⁾。

伊勢・杵築・住吉・日吉の各大社の本殿形式は孤立的形式であり、一般的に広く用いられたのは流造・春日造である。次にこれらについてみたい。

流造の祖型とされる賀茂分雷神社・賀茂御祖神社本殿は、現在の研究状況としては複雑である。包括的な整理を行った稲垣栄三によれば⁽¹⁸⁾、天武朝に社殿が建てられていた可能性があるが、流造の本殿形式は史料적으로는嘉元二年（一三〇四）までしか遡りえない⁽¹⁹⁾。結局、流造に関しては、現存最古の遺構で、十一世紀後半から十二世紀初頭頃の建立とされている宇治上神社本殿（図集解説 121 頁）より遡る手だてではない。

春日造の源流となる奈良春日大社本殿は古社記によって神護景雲二年（七六八）に造営されたとされていて、図集ではそれより以前に遡るとしているが、当該史料は信憑性が低く、黒田昇義によれば「平安朝の末頃の撰述」（十一世紀の中期）とされる⁽²⁰⁾。周知の如く春日造の現存遺構で最古のものは円成寺春日堂・白山堂で、建久七・八年（一一九六・七）の建立とされている⁽²¹⁾。春日大社本殿を描く春日曼荼羅は十二世紀に遡るものはないが、治承三年（一一七九）以前の社頭景観を描くと考えられるものが三本現存している⁽²²⁾。一方、儀式（貞観儀式と考えてよいとされている）には春日祭に「神殿」が用いられているから、この神殿が恒常的な施設か否かという問題は残るものの、九世紀後期には本殿の建物が存在した可能性がある⁽²³⁾。因みに、春日曼荼羅に描かれた景観はどれだけ遡るかは確証がないが、その内、根津美術館本は春日造の本殿に三斗・臺股を描く。これが事実を反映しているなら、春日造もある時期に意図的な復古形式が用いられたと考えることも可能である。

即ち伊勢神宮を除くと、孤立的形式も、普遍的な流造・春日造も平安時代中期を遡ることはないということが史料的には、導かれる結論である。この事実は、神社本殿形式の超時代的な古き伝統の産物ではないことを意味すると理解するのが自然である。このように見ると神社本殿の形成、とりわけ中世以後普遍的となる本殿形式の成立と流布は九世紀から十一世紀の平安時代、即ち中世の前段階から中世の冒頭の時期が焦点となってくる。

ただし、一方で考慮すべき事項として、黒田龍二が指摘するように、神社建築には「復古的揺り戻しがおこる」⁽²⁴⁾という強固な保守性がある点である。ただこうした保守性が、明確な教団組織や教義体系を持たない神祇信仰において何故生ずるのか、保守性の内実が如何なるものか、保守性の歴史的な変遷過程はどうか、といった点になると、未だ解明されていないと言うべきであろう。

以上の議論に残された課題として、以下の二点が挙げられる。まず上述の議論は歴史学的に実証できる範囲においてであるという留保付きである点である。第二にその事と関連するが、発掘調査によって検出される大規模な掘立柱建物や棟持柱を持つ掘立柱建物の神社本殿との関係について如何に考えるべきかという問題である。

後者の発掘遺構を神社建築と考えるか否かに関しては、歴史学・考古学の分野で考え方が相対立して容易に決着しがたい⁽²⁵⁾。建築史学においても例えば西本 6 号遺跡（東広島市）を後の神社建築にも弥生時代の「祭り事」にも繋がるかとする宮本長二郎と、それに批判的な山野善郎の考え方が対立している⁽²⁶⁾。建築史家は棟持柱などの建築形式によって安易に神社建築に結びつけるきらいがあるが、少なくとも現存建築遺構から知られる七世紀以降の

棟持柱を持つ建物が極めて孤立的な存在であることを前提としておかねばならない⁽²⁷⁾。

この問題を考える際、棟持柱を持つ発掘遺構について整理した広瀬和雄の議論⁽²⁸⁾は極めて有意義であると同時に多くの問題を孕んでいる⁽²⁹⁾。広瀬はこの種の建物（広瀬は神殿と呼ぶ）が一代しか存続しないという特性を抽出している。これは後の神社本殿には引き継がれない特性である。世代毎に建て替えるのであれば、天皇の代替わり毎に建て替える宮殿と理解した方が歴史的連続性はある。尤も、連続性だけを重視する必要はないが、ともかくも古墳時代以前の神殿遺構と七世紀以降の神社本殿は本質的に異なると理解すべきことになる。また広瀬は、棟持柱を持つ建物の数が少ないことを神殿として判定する根拠の一つとする⁽³⁰⁾。しかしその要素だけでは、当該建物に政治・行政的機能を考えることも可能であり、集落の共同施設（例えば蔵⁽³¹⁾）や葬送儀礼に関わる建物を考えることも可能である。

仮に古墳時代以前の神殿である棟持柱建物が伊勢神宮に集約されると考えると、天皇家がその形式を伊勢以外で使用させなかったことになるが⁽³²⁾、そのことは神社建築もしくは神殿の系譜関係に伊勢神宮成立以前と以後でやはり断絶が生ずることを意味する。

5. 神社建築研究史の視点

以上のように、神社建築に関する従来の常識が認め難いとなると、神社建築を如何に考えるか、その方法や視点を改めて構築し直す必要が生じる。如何なる方法が可能か、有効か、実証的な研究の積み重ねが必要であるが、近年の研究動向の中で三つの有効な方法について検討したい。

ア、古代における神社の概念規定

現状で神社建築、特にその成立期の状況を考察するためには、神社の概念を明確にすることが不可欠である。前節で見た発掘遺構と神社建築の関係に関しても、神殿の語義が曖昧なまま議論されているきらいがある。宗教的な営為に関わるすべての建築を神殿と呼べば、それは神社本殿と関連があるし、異質な部分もあるのは当然ということになる。

神社の概念を極めて限定的に規定して、議論を明確化しようとしているのは丸山茂である。丸山は「飛鳥・奈良・平安時代の神社建築」⁽³³⁾において、国家による神社建設が自然発生的な神社に先行すること、神社建築史の記述も歴史上神社と考えられた建物の変遷に即して行われるべきことを主張し、天武天皇の創始した「律令的神祇体制」によって官社が設定され、神社建築が全国に普及したとする⁽³⁴⁾。そしてこのことを論文において詳細に検証して提示した⁽³⁵⁾。具体的には古事記・日本書紀を検討して、天武朝以前に神社は殆どなく、官社制成立以前にも地方首長のための神社はごく僅かで、在地の神社は殆ど認められなかったとした。そして「官社制に先行して国家によって建設された施設、官社制によって成立した施設、および官社制の影響により官社の予備軍として在地に発生し国家にもそのように認識されたであろう在地の信仰施設」（註(35)論文15頁）を「神社」と呼び、それ以外の在地の信仰対象を「在地の宗教施設」として峻別した。その上で出雲国風土記や東大寺越中国開田図から奈良時代に多くの民間の神社があったとは言えないことを証明した。更に風土記を検討して、そこに見られる神社は政府の意志により形成されたもので、通説のような農耕儀礼に発する痕跡はなく、社殿の存在も国家による神社に明証ありとする。精緻な論証は強い説得力を持つが、「在地の宗教施設」、或いは大宝令にいう「祠」が、その後の歴史的な展開の過程でどうなるのかが問題として残る。丸山も当該論文の末尾で若干の言及を行っているように、「在地の宗教施設」の多様化と仏教への吸収があったとすれば、それは神社への吸収もあったはずであり、そうして成立する神社と官社はどのような関係になるのか。また平安初期以降に官社制が衰退したとすれば、その後神社が再び一定の勢力を持つのはいつであり、どのような制度や体制を背景として持っていたのか。前節で見た神社本殿形式の形成時期（九世紀から十一世紀）と重なる問題であり、官社制の成立、平安期の官社と「在地の宗教施設」の再編という二段階を経てようやく我々が現存する神社建築を通して把握できる神社の認識に至るのではないかという想定が可能となろう。

イ、祭祀組織の形成

岡田精司⁽³⁶⁾や黒田龍二⁽³⁷⁾が強調するように、神社の存立条件としての人的組織、即ち祭祀組織の問題は建築を考察する際に欠かすことができない。寺院に関しては、近年の寺院史研究の隆盛によって寺院組織の解明が進み、寺院建築やその堂舎の空間の性格も寺院の組織構造と関わらせて理解することが可能となっている。しかし神社建築史ではこの面でも十分ではない。そのような研究状況の中で、三橋正は、春日・大原野・吉田・梅宮・平野・賀

茂の平安京近辺の神社を取り上げ、その祭祀組織形成の過程を検証した。その結果、神社固有の神官組織の成立が摂関・院政期であること、それ以前は固有の祭祀主体はなく、単なる維持組織があったにすぎないことを明らかにした⁽³⁸⁾。例えば春日社を例にとれば、平安前期には祭の度に神祇官人が派遣されていたが、十世紀末に常住の神社神主が成立した。従来からこれとは別に預がいたが、これはあくまで社殿維持・造営のためだけのものであって、常住神主成立後の摂関期から院政期にかけて「神主—正預—権神主—次預—権預—若宮預」という組織体ができあがった。同じ事は多少事情の差こそあれ大原野・吉田・梅宮・平野・賀茂でもそれぞれ見られる。とすれば、官社制衰退後の神社の再編もこの組織形成に求めねばならない。院政期以前の神社に恒常的祭祀組織がなく、施設維持組織のみがあったとすれば、この時期の神社建築の未発達な状況、或いは積極的な施設の改変が乏しかったことが想定される。しかし一方で、摂関・院政期以前の神社維持組織の施設維持の実態を極める必要もあろう。朝廷の崇敬が極めて厚かった賀茂社では十一世紀前期に神職組織が整備されるが、その前段階に天皇の行幸、摂政・関白の参詣などが盛んとなって、祭礼が充実し、所領も増加しており、これと並行して九世紀以降様々な祭祀施設が整備されていった⁽³⁹⁾。即ち平安期の神社の歴史的展開過程は単純な祭祀組織の整備の観点だけでは理解しきれない。

ウ、祭祀組織の実態

以上の二点が古い時代から時間軸に沿って見る視点とすれば、逆に遡及的に解明する視点がある。即ち近世以降の祭祀組織を媒介とする視点、具体的には宮座に注目する視点である。宮座に関する研究は主として民俗学の分野において豊富な研究蓄積があるが、これを神社の建築的施設と対応させること、同じ視点を時代を遡らせることによって、神社建築の形成や展開の解明に役立てる可能性がある。

宮座は主として神社を中心にして形成された村落の自治的組織であり、村落の神社の祭祀の主体となる組織でもあった。黒田龍二は「宮座、祭礼と神社建築」⁽⁴⁰⁾において、シュウシ（宮座構成員の集い）や太夫成等の宮座行事、秋祭り等の祭礼の際に使われる空間を、神社の拝殿・酒司堂、本殿の前庭などに分類して西脇市域における実態を整理した。この視点は、そもそも神社の祭祀空間が何であり、その中で建築的施設がどのような位置づけを持っているかについて、明確な指針を与えるものである⁽⁴¹⁾。黒田は『神社 建築と祭り』⁽⁴²⁾においても御上神社を例に、宮座の祭祀と社殿群の構成や配置の関連について指摘している。

黒田が指摘するように⁽⁴³⁾宮座組織の観点から神社建築を評価する方法論は、未だ確立されているとは言い難い。現行の宮座行事からの遡及的な研究は、関連文献史料が概ね室町時代に限られることなど、歴史学的考察に限界も伴う。しかし一方で、この視点は村落の形態や村落組織の問題と直接的に関連する。具体的には村落の社会構成、村落の支配や結合の関係、村落運営と寺社勢力の関係などである。また例えば年中行事絵巻に描かれた今宮祭や城南宮祭かとされる神社等の場面では、庭や拝殿・舞殿などが人の使う場として描かれていて、直ちに結びつけることはできないにせよ、近世以降の宮座行事との類似性を指摘できる。とすれば、宮座の行事であるか、それとは別の神事であるかは兎も角として、宗教のための空間としての神社は、本殿だけを追求しても解明できないことを意味している。こうした観点から門や拝殿を考察した藤澤 彰の研究がある⁽⁴⁴⁾が、なお展開の余地は大きい。

6. おわりに

以上、神社建築に関する既往の成果やそれを踏まえた通説的理解に対する疑問点を提示し、あわせて神社建築研究の方法的可能性について論じてきた。近年の研究動向は真の意味での国家神道の呪縛を脱却した神社建築史研究への展望を切り開いていると考えられるが、なお方法論の深化とそれを踏まえた実証的な研究の積み上げが不足している。

なお本稿では、論述の個々の歴史的な考証に関しては、批判的観点や問題点抽出を優先したために、実証を経ない仮説を提示した部分が少なくない。これについては読者の批判を仰ぐと共に、自らの研究課題とも位置づけており、今後の研究を進めたいと考えている。

註

(1) 学術的に実証されていないという意味で虚構と表現した。後述の弥生・古墳時代の発掘遺構との関連性が実証されれば、虚構ではなくなる。

(2) ここで述べることは既に黒田龍二も言及している。黒田龍二「書評『日本建築史基礎資料集成一 社殿 I』」(『建築史学』第三十二号 平成十一年三月)

(3) このことは岡田精司も「伊勢の神明造と出雲の大社造の二つが、神社建築の原点であるかのように言われたのは、国家神道と軍国主義のもとにおける近代の一時期の現象である。」と明確に指摘している。岡田精司「大型建物遺構と神社の起源」(広瀬和雄編著『日本古代史 都市と神殿の誕生』新人物往来社 平成十年七月)

(4) ブルーノ・タウト『日本美の再発見』(岩波書店 昭和五十一年五月)、第一刷発行は昭和十四年六月、昭和三十七年二月改訳版に「伊勢神宮」(初出は昭和八年)が追加された(同書あとがきによる)。

(5) ただし17頁では、今日の伊勢神宮の形式は奈良朝に遡る形式で、仏教に対抗すると共に刺戟を受けた「神道」側からの努力の表現とする適切な指摘がある。

(6) このことについては黒田龍二が言及している。黒田龍二「第二次世界大戦までの神社建築研究」(黒田『中世寺社信仰の場』思文閣出版 平成十一年八月 所収、初出は平成十年)

(7) 福山敏男『伊勢神宮の建築と歴史』(日本資料刊行会 昭和五十一年十二月 旧版は昭和十五年刊)

(8) 岡田精司「神社建築の源流」(『考古学研究』第46巻第2号 平成十一年九月)

(9) 岡田精司「伊勢神宮における定期造替・遷宮制度の成立」(『三重県史研究』10号 平成六年)

(10) 岡田精司「律令祭祀における伊勢神宮」(同『古代祭祀の史的研究』平成四年十月 塙書房、初出は昭和六十三年十二月)

(11) 岡田精司「神社の源流はどこまで遡れるのか」(『神道の謎を解く本』平成十一年四月 洋泉社)、黒田龍二「神のやしろの曙」(前掲註(6) 黒田著書所収、初出は平成六年)。

(12) 藤澤 彰「出雲大社の宝治・慶長・寛文度造営頃の境内建築の復元について」(『古代文化研究』第6号 島根県古代文化センター 平成十年三月)、同「出雲大社の慶長度造営本殿について」(『日本建築学会計画系論文集』第506号 平成十年四月)、以下の出雲大社についての記述はこの藤澤の論考に依っている。なお光井渉「近世後期における神社造営と本殿形式の変化について」(『建築史学』第三十号 平成十年三月)も江戸幕府と松江藩の意向について論及する。また藤澤が整理しているように、藤澤の明らかにした事項の一部は川上貢・三浦正幸などの先行研究の指摘している部分があるが、ここでは煩雑になることを避け、引用は割愛する。

(13) 『日本建築史基礎資料集成』一 社殿Ⅰ(中央公論美術出版 平成十年六月 以下、資料集成一と略記す)「出雲大社本殿」の項(三浦正幸執筆)

(14) ここでは大社造の現存最古の遺構であり、古制を残すとされる(『図集』など)神魂神社本殿(天正十一年建立)の位置づけが問題となる。通常は大社造の形式が天正まで遡り、杵築大社本殿も神魂神社と同様の形式を持っていたと理解されているが、私は、杵築大社が少なくとも寛文度造営に際しては神魂神社を参考にしたと考えた。神魂神社は天正以前の建築形式は不明であるから、当然これも「古制」を残しているのか否か不明である。

(15) 資料集成一「住吉大社本殿」の項(山野善郎執筆)

(16) 前掲註(8)

(17) 黒田龍二「北野天満宮本殿と舍利信仰」(前掲註(6) 黒田著書 初出は昭和五十九年二月)、資料集成一「日吉大社東本宮本殿」の項(櫻井敏雄・稲垣栄三執筆)

(18) 資料集成二 社殿Ⅱ(中央公論美術出版 昭和四十七年六月)「賀茂別雷神社本殿・権殿その他社殿、賀茂御祖神社神服殿・大炊所」の項(稲垣栄三執筆)

(19) 稲垣栄三は、本殿とその周囲の祭祀のための建物は「古い起源をもつ」とし、また「天武朝のころすでに社殿が造られていたと考えてかならずしも無理はない」などと、本殿の建物の成立が古くに遡るとの前提で、史料を解釈しようとしている(前掲註(18))。この傾向は他の神社建築研究者にも往々にして見られるが、逆に本殿の建物の成立は古くないことを前提に史料を解釈する可能性も対等な価値のあることを示している。史料解釈の立場としては、確実な史料によってのみ本殿の建物の存在を解明してゆくべきだと考える。

(20) 黒田昇義『春日大社建築論』(綜芸社 昭和五十三年七月)

(21) 資料集成一「円成寺春日堂・白山堂」の項(佐藤正彦執筆)

(22) 川村知行「春日曼荼羅の成立と儀礼」(『美術史』第百十号 昭和五十六年三月)、三本とは春日大社本・ボストン美術館本・根津美術館本である。

(23) 資料集成一「春日大社本殿」の項(佐藤正彦執筆)では八世紀初頭に本殿の建物があったように記しているが、その解説は明らかに神社の創始と本殿の創建を区別していない。

(24) 前掲註(11) 黒田「神のやしろの曙」

(25) 最近の議論では広瀬和雄「神殿論批判」への反論(『考古学研究』第46巻第3号 平成十一年十二月)、前掲註(8) 岡田論文。

(26) 第4回安芸のまほろばフォーラム記録集『発掘された古代の「神殿」を検討する』(東広島市教育委員会 平成十年三月)

(27) 当然のことながら、近代の国家神道のもとの神明造の普及については除外して考えている。なお註(3)も参照。

(28) 広瀬和雄「クラから神殿へ」(浅川滋男編『先史日本の住居とその周辺』同成社 平成十年十二月)

(29) 広瀬の議論は多岐にわたり、傾聴すべき説が少なくなく、筆者は高く評価している。従って、今ここで述べる若干の批判も、本来広瀬のような包括的な説を構築した上で述べるのが妥当であるが、筆者にその準備もなく、今後の課題としておきたい。

- (30) 前掲註 (28)
- (31) 広瀬は神殿と蔵との関係についても論じている。註 (28) 参照。
- (32) このことは古事記における天皇の家以外に鯉木を禁じた雄略天皇の説話を想起させる。
- (33) 太田博太郎監修『日本建築様式史』(美術出版社 平成十一年八月) 所収
- (34) 前掲註 (33) 36・37 頁
- (35) 丸山茂「神社建築の形成過程における官社制の意義について」(『建築史学』第三十三号 平成十一年九月)
- (36) 前掲註 (11) 岡田論文
- (37) 前掲註 (11) 黒田論文
- (38) 三橋正「中世的神職制度の形成」(『神道古典研究』会報十五号 平成五年十二月)
- (39) 前掲註 (18)
- (40) 『西脇市の寺社建築』(西脇市 平成十二年二月)
- (41) 黒田は「湖北の「オコナイ」」(『週刊朝日百科 日本の国宝』第 80 号 朝日新聞社 平成十年九月) でもこの問題に言及している。
- (42) 『朝日百科日本の国宝別冊 国宝の歴史と旅 4 神社 建築と祭り』(朝日新聞社 平成十二年二月)、なお同書は書物としては共著であるが、構成と大半の原稿執筆は黒田龍二が担当している。
- (43) 前掲註 (41)
- (44) 藤澤 彰「東大寺八幡宮の社殿と祭儀」(『建築史学』第 9 号 昭和六十二年九月)、同「山口地方の楼拝殿とその祭儀について」(『日本建築学会論文報告集』第 384 号 昭和六十三年二月) 他